

長畝ふるさと通信



【2020年8月号】

■ 特別な夏

佐渡では8月になっても雨続きで、少々肌寒い感じのお盆でしたが、後半は連日の猛暑日となり、全国では40度を超える地域もあったとか。予想通りお盆の帰省客は極端に少なく、いつものような活気もないまま「特別な夏」が終わろうとしています。

田んぼの状況はと言いますと、7月の日照不足がコメの品質にどう影響するかは収穫してみない事には何とも言えませんが、8月末時点での稲姿を見る限りは順調な生育をしている模様です。

WCSは長雨の影響で刈取作業が大幅に遅れたために、その間に草丈が伸び収穫量が昨年の1.5倍近くに増えました。怪我の功名です。



(8月末に刈り取ったWCSのロール)

■ 見直される生活スタイル

新型コロナウイルス感染拡大がこれまでの生活スタイルを見直す機会になっています。GDPが戦後最大のマイナスだとか難しいことは分かりませんが、経済が疲弊していることは実感できます。仕事が減り、旅行や飲み会など楽しいことを我慢し、お金を使わないよう引きこもる…。コロナが終息すれば(するんだろうか?)以前の社会に戻る保証はどこにもありません。東京をはじめとした大都会は「集中」と「過密」によってもろさをさらけ出したように思います。地方分散して食糧の自給自足力を高め、インバウンドに頼らない強い国づくりを目指してほしいと思っています。



8月の終わりに佐渡の最北端「鷲崎」で、海で取れた魚を発酵させた独自の肥料を使う変わった農法で、全国のコメ食味コンテストで数々の受賞歴のある本間太郎さんを訪ねました。真っ黒に日焼けした79歳は、「佐渡から食の安全と健康を発信したい」と毎朝4時には田んぼへ出掛け、農作業に励むという。ブリやカツオ、マンボ

ウなどの魚に杉の葉や雑草を混ぜ、独自に配合した発酵肥料を田んぼへ撒くという。「孫に食べさせるコメは自然栽培」「オレはバカだから何でも自分でやってみんと次へ進めん」そうで、実績を証明してから仲間を増やしたいと意欲満々に語ります(難点は健康を進めながら常にタバコを放さないこと・・・)。「コンテストに出すのはコメを高く売りたいんじやのうて、実力を証明するためさ」・・・カッコイイ・・・地域の資源を活用し循環させる経済の見本ではないかと感心するばかりです。

本間さんのようにはいきませんが、「価値あるお米」づくりを続けて多くみなさんに食べてもらおうと、あたためて思う次第です。田んぼの向こうには青い空と青い海・・・絵になる風景です。

■ 田園回帰

8月19日の日本農業新聞に「田園回帰に地域格差」の見出しを見つけました。農山村の動向を分析する「持続可能な地域社会総合研究所」の調べによると、2014年と19年を比較して過疎市町村における30代女性の増加率は3割も増えており、特に山間部や離島で増加が顕著だという。一方で転入より転出が進む過疎自治体も多く、若者が農山村を志向し移住する「田園回帰」の地域格差も広がっているらしい。新潟県は比較的、定住増加人数が増えているようですが、佐渡においてはそれにも増して離農者が年々増加しており、JAによると毎年100人ものコメ生産者が減少し、JAへのコメ出荷契約数も2%づつ落ち込んで販売量が十分確保できていない状況です。

中国では将来の食糧確保に向けて「食べ残し禁止」や「大食い禁止」などの対策を政府が打ち出しているようですが、自給率40%にも満たない我が国はどう思っているのでしょうか。この機会に生活スタイルだけでなく、産業のスタイルも見直してはいかがなもんかと思う次第です。

9月10日頃から収穫作業が始まります。今年も美味しいお米を期待して下さい。

